

令和六年度 A日程入学試験問題

国語

2月3日(土)

— 注意事項 —

- 2 1 問題は1ページから28ページ、解答用紙は一枚である。
次の指示にしたがうこと。
- 文学部（日本文学科・中国文学科・史学科）は**1**・**3**・**4**を解答すること。
文学部（外国語文化学科・哲学科）、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、
観光まちづくり学部は**1**が必須、**2**・**3**・**4**から一つを選択して解答すること。
（解答する問題番号を、解答用紙のマーク欄にマークすること。選択問題を複数解答し
た場合は無効とする）
- 4 3 解答はすべて別紙解答用紙に記入すること。
試験時間は六〇分である。

1 「全学科の 必須」

文学部日本文学科・中国文学科・史学科は解答欄 1 ～ 13 に、文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済

学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は解答欄 1 ～ 20 に解答すること。

(文学部日本文学科・中国文学科・史学科は問一～問九で40点)

(文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は問一～問十四で70点)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

政治的なもの——それはシュミットを動かしつづける固定観念のごときものであった。それは彼の思考を促す基本動機であり、その認識経験が収斂^{しゅうれん}してゆく基礎範疇^{きそはんちゆう}であった。ほとんどあらゆる物事が「政治的なもの」の水準において、考察され判断され評価されていく。そのようなものとして一身が⁽¹⁾ ジュンじられる概念となった。

シュミットをこのように衝き動かしているのは、その「中立化と脱政治化」の過程に対する危機的認識であった。ヨーロッパの歴史における「精神的な転回」のなかで最も重大な結果をもたらしたと彼が考える、神学という中心領域の放棄すなわち中立化が、十九世紀には政治的権力にまで及んだということ、そこに中性権力や中性国家というかたちにおいて「政治神学」を完成させたということ、この政治の脱中心化が、シュミットのうちに「政治的なもの」のゆくえんについて絶えざる考察を促すのである。そうだとすれば、^(a) 世俗化された世界のどのような事態が、このように強烈な危機意識を刺戟^{しげき}するのだろうか。

『政治的なもの』の概念』と題するテキストを、シュミットは一九二七年の初版以降繰り返し刊行している。この改版の際の修正や削除をめぐる問題、とりわけ第三版(一九三三年)においてなされた改訂や変更については、すでにレーヴィットによって指摘されている。あるいはまた、「一九六三年のシュミットが、一九三三年版の『政治的なもの』の概念』について沈黙していたことは何を物語るのか」といった問いも研究者によって提起されている。六三年は、いわば第三版を⁽²⁾ 黙殺して第二版(一九三二年)が復刊された年でもあった。この問いに対しては差しあたり、その⁽³⁾ 懸案の主題についての「中間所見」という副題をもつテキストが、同年に刊行されたことが一つの答えとなるだろう。

^(b) 状況にに応じてそのつど抗争的に決定していく、この「機会原因主義」的な修正過程それ自体を、テキストにそくして^(a) 辿りなおそうというのではない。ただ、この改訂のなかに、危機意識に促されたシュミットの基本動機を見出す手がかりがあるとすれば、それを無視するわけにはいか

ないだろう。

例えば第二版の次のような箇所である。「味方と敵の区別が、たんなる偶発性によってであれ消失するなら、そこには政治的に無色の世界観、文化、経済、道徳、法、芸術、娯楽等々が存在するにすぎず、政治も国家も存在しない」。政治的なものの根本規定を「味方と敵の区別」におくシュミットの思考は、政治も国家も存在しないような世界への I へと向けられている。そこに消極的に並置された物事のみを存在させるような中立化の世界から、政治的なものを守らなくてはならない、というふうに思考は動いている。

このテキストに対するレオ・シュトラウスのよく知られた『注解』（一九三二年）は、その力線を強調して読んでいた。「世界が娯楽の世界にならないようにするただ一つの保証は、政治と国家である。こうしてみれば、政治に敵対する者たちが望んでいることは、結局、娯楽の世界を、楽しみの世界を打ち立てることであり、つまり真剣さなき世界を打ち立てることなのである。……シュミットは、政治的なものが脅威に晒されているそのなかに、人間生活の真剣さが脅かされているのを見るがゆえに、政治的なものを是認している。政治的なものは是認とは、結局、道徳的なものは是認に他ならない」。

研究者が指摘するように、シュミットはこの注解に応答したのだろう。しかしそれ以上に、おそらく時代状況に「応答」しようとして、第三版において上記の箇所を次のように書きかえたのである。

味方と敵の区別が、たんなる偶発性によってであれ全面的に消失していたなら、人間は、自らの現世での生活を享受する十全な安全性を獲得したであろうに。「人はこの人生において何ら完全な安全性を期待すべきではない」という古くからの命題は乗り越えられたであろうに。したがって、存在していたであろうのは、政治でも国家でもなく、ただ、政治的に無色の世界観、文化、文明、経済、道徳、法、芸術、娯楽等々でしかなかったであろう。

この奇妙に転倒した語法をどう考えればよいのだろうか。直接法にもとづく否定形によって語られていた政治と国家は、抗争的な⁽⁴⁾ありうべからざる接続法を通して「是認」されている。しかも、ありえないと同時に、あつてはならない政治的なものの消失が、あらたに導入された「安全性」の観念との連関において論じられている。ここで安全性の獲得をめざすことは、どこまでも否定的な意味で捉えられ、安全性の世界はいわば「真剣さなき世界」と同一化される。味方と区別された敵をもつこと、あるいはその区別を保持することの意義は、従って、安全性を欠く事態、すなわち危機的な状況においてこそ明白なものとなるだろう。

ここに「古くからの命題」⁽⁵⁾として引用されているのは、アウグスティヌスのものである。アウグスティヌスが引照されることのうちに、二十世紀という時代において⁽⁵⁾アラわになった「政治神学」的な問題状況が示されているだろう。シュミットにおいてそれは、人間を

II

のなかに投じること、そこにおいて考えることという「決断」において思い出されているのである。

この状況はまた、政治的なものの消失に、あらたに加えられた「全面的」という語においても映し出されているだろう。全面化ないし全体化という時代状況が、^(d)この奇妙な接続語法のうちに反転した像を見せているのである。そして、世界の全体化を人々の眼前に現出させたのは、いうまでもなく世界戦争という危機的事態にほかならない。それはこの時代に生きる者たちを、その「立場」の如何を問わず根底から条件づけるだろう。

世界戦争は、「世界」という概念の物語において決定的な事態を出現させた。それは、戦火が世界を覆いつくすことによって戦争が世界化した、ということの意味するだけではない。それは同時に、世界が戦争状態としてあること、まさしく世界Ⅱ戦争という状況をもたらした。とりわけ第二次大戦は、その「世界」大戦の内実を露出するものとなった。総力戦が遂行され、総動員体制に求⁽⁶⁾シン化してゆく世界の全体化こそが、世界戦争が生み出す根本的な「世界性」である。このような世界の戦争化、あるいは戦争の日常性の現出は、何よりも政治についての思考を困難にするだろう。

「味方と敵の区別は、結合ないし分離、連合ないし離反の最も強度な場合を表わす」。これがシュミットの政治的なものについての概念規定であった。この結合と分離は、その介在性において重要なのではない。具体的な対立あるいは敵対関係の強度がその核心なのである。このシュミットの闘争的思考は、^(u)世界の戦争状態において難問に直面せざるをえない。それは時代の傾斜に彼を引き寄せるだけにとどまらない。概念を踏み破り、政治的なものを「越え出してしまう」戦争、従って味方と敵の区別を曖昧にするのみならず、敵そのものを消失させてしまうような戦争。世界Ⅱ戦争とはそういう戦争であった。

このような（すなわち、人類のその時々^(w)に決定的に最終戦争と自称される）戦争は、特に激烈な非人間的な戦争であることは必然的である。なぜなら、このような戦争は——政治的なものを越え出してしまう——敵を、道徳的およびその他のカテゴリーにおいて非難するとともに、予防されなければならないのみならず決定的に絶滅されなければならないところの、それ故もはや単にそのもの^(v)「国境の中へと追いつ返されるべき敵ではないところの、非人間的な恐ろしいものにされねばならないからである。

シュミットが「^(w)技術性の宗教」と呼んだもの、すなわち人間のもつ無制限の力や支配への信仰と、それがもたらした世界戦争の「絶滅」性についてのこのような認識は、彼の時代経験にぴったりと貼りついている。それが「全体国家に対して有効なのは、同じく全体的な革命のみである。街頭^(x)ホウ起やバリケードについての^(y)キュウ来の観念は、このような現代的な権力行使の可能性に直面して^(z)のように思われる」といった判断を導き出したのである。

III

に等しいもの

そうだとすれば、再び政治的なものについて語りなおすこと、しかも改めて闘争的な概念のもとに語りなおすことは、シュミットにとって自己^(Z)弁^(Z)メ^(Z)イの要素を含んでいるだろう。しかし、それだけで片づけることはできない。そう言えるものを彼の議論は含みもっている。国家にもその「全体」化にも回収されない政治のあり方を、どのように物語ることができるのか。それは「全体的な革命」ではなく、非国家のおよび前国家的な条件をも視界において考えなければなるまい。政治的なものは、その存立の基礎へと差し戻されているのである。それは、ひとりシュミットにとってのみ重要な課題なのではない。

(市村弘正氏の文章に基づく)

- (注) ○シュミット―ドイツの政治学者。 ○中性権力―信仰や道徳観については中立的立場をとる権力。
- 一九三三年―ナチスが政権を掌握した年。 ○レーヴィット―ドイツの哲学者。
- レオ・シュトラウス―ドイツ出身の哲学者。 ○アウグステイヌス―ローマ帝国の司教。
- 総力戦―国家が有する人員・物資を総動員して行う全面戦争。

問四 傍線部 (b) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 8 にマークしなさい。

- ア 時代状況が変化する度に、シュミットはその変化に正面から向き合って自らの著作を改稿したということ。
- イ 自らの社会的立場が変更されるのに伴って、シュミットは臨機応変に自らの著作を書きかえたということ。
- ウ 社会生活が不安定になってゆく状況に鑑みて、シュミットは自らの著作を批判的に再検討したということ。
- エ 政治状況の混乱に乗じて、シュミットは自らの著作を体制にとつて都合のよい形に書き直したということ。
- オ 論争や批判が起こる機会に対して、シュミットはその批判に反撃すべく自らの著作を修正したということ。

問五 空欄 I に入る語として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 9 にマークしなさい。

- ア 期待
- イ 無関心
- ウ 憧れ
- エ 怖れ
- オ 驚き

問六 傍線部 (c) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 10 にマークしなさい。

- ア 安全を保つという政治の役割が忘れられた不真面目な世界。
- イ 生活の豊かさや安全を犠牲にしてまで娯楽を優先する世界。
- ウ 味方と敵を区別することを忘れたため安全が脅かされる世界。
- エ 政治的な堅苦しさを否定したことで安全が確保されない世界。
- オ 道徳的な規準を欠落させてはいるが安全で娯楽に満ちた世界。

問七 空欄 Ⅱ に入る語として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 11 にマークしなさい。

ア 安全性

イ 危険性

ウ 偶発性

エ 娯楽性

オ 全面性

問八 傍線部 (d) の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 12 にマークしなさい。

ア 味方と敵の区別が消失した世界は、敵が存在しないという点で完全な安全性を獲得しているが、しかしそれこそが世界の全体化という危機的状況なのだと言語的に語っているということ。

イ 政治的なものが消失することによって世界戦争という危機的事態が生起し、それによって安全性が脅かされるという逆説は、奇妙に転倒した接続話法によってしか語りえないということ。

ウ 人々は世界の全面的ないし全体化という状況を直視することはできず、世界戦争という否定されなければならない危機的事態を通してしか人々の眼前に現出させることができないということ。

エ 戦争が世界化するという状況は世界中が敵になるといふ事態を意味しており、味方と敵の区別が消失するという仮定は、時代状況を反転させるような接続話法でしか言い表せないということ。

オ 戦争が世界化していることを反転すれば、世界が戦争状態としてあることを意味することになり、このように反転可能な構図の両面が世界戦争という時代状況の中では見えているということ。

問九 問題文の内容としてふさわしいものを、次のア～カの中から二つを選び、解答欄 13 に二つマークしなさい。

- ア シュミットは『政治的なものの概念』を何回も改訂して刊行し直しているが、その主題は一貫している。
- イ レオ・シュトラウスの『注解』に応答するために『政治的なものの概念』の第二版が出されたと見られている。
- ウ 全面的で非人間的な世界戦争は「政治的なもの」を越えてしまう危険なものであるとシュミットは考えていた。
- エ 『政治的なものの概念』が初版から第二版へと書きかえられたのは、レーヴィットの指示によるものである。
- オ 『政治的なものの概念』の第三版においてシュミットは、「政治的なもの」はもはや不必要だと述べている。
- カ 一九六三年に『政治的なものの概念』の初版が復刊されたことには、世界大戦という現実の状況が反映している。

注意 文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は、次のページに問題が続きま

す。
←

問十 (文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部のみ解答すること)

波線部 (X)・(Y)・(Z) に相当する漢字として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、(X) は解答欄 14 に、(Y) は 15 に、(Z) は 16 にマークしなさい。

14	(X)	
オ	工	ウ
包	砲	蜂
イ	ア	
奉	放	
15	(Y)	
オ	工	ウ
及	急	級
イ	ア	
旧	求	
16	(Z)	
オ	工	ウ
迷	盟	命
イ	ア	
名	明	

問十一 (文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部のみ解答すること)

空欄 Ⅲ に入る語として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 17 にマークしなさい。

- ア 弊履
- イ 慈雨
- ウ 兎戯
- エ 脱兎
- オ 人馬

問十二 (文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部のみ解答すること)

波線部 (U) の理由として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 18 にマークしなさい。

- ア 敵味方を区別するシュミットの闘争的思考は、世界の戦争状態をさらに対立的なものにするから。
- イ 世界が戦争になるような状態では味方と敵の区別がより明確なものとなり、政治性が後退するから。
- ウ シュミットが問題にする「政治的なもの」は、もともと概念規定が明確にできないものであるから。
- エ 結合と分離はその介在性において重要なわけではなく、具体的な対立や敵対関係が重要であるから。
- オ 世界が全体化するような戦争は、最終的に味方と敵の区別さえも無くしてしまうものであるから。

問十三 (文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部のみ解答すること)

波線部 (V) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 19 にマークしなさい。

- ア 国外においては非人間的で恐ろしい敵。
- イ 国内においては絶対的に否定される敵。
- ウ 相対的に区別されているにすぎない敵。
- エ 国境の外に出ると味方になるような敵。
- オ 決定的に絶滅されなければならない敵。

問十四 (文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部のみ解答すること)

波線部 (W) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 20 にマークしなさい。

- ア 道徳的な規準を持たず、人間の技術はどこまでも発展可能であると盲信する考え方。
- イ 敵を絶滅させるためならば努力を惜しまず、徹底して技術を推進する危険な考え方。
- ウ 技術という新たな神に追随して、人類を絶滅させることもありうる逆説的な考え方。
- エ 人間の能力には限界がないと信じ、技術の力によって神を創造しようとする考え方。
- オ 際限ない人間の技術の力が神を超え、やがては神をも支配するに至るという考え方。

この問題は、解答欄 21 ～ 27 に解答すること。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(30点)

牧畜民の文化と一口に言っても、ステップ型とオアシス型など相違点もちろんある。しかし一方では、共通点もまた見てとることができ

る。たとえば技術の側面において。牧民たちは多少とも遊動する⁽¹⁾から、建築のような不動産や、こわれやすい土器のような技術は一般的に乏しい。しかし動産的で交易品ともなるようなフェルト織物(絨毯など)、皮革製品、金属加工、武器および装飾品や、所によっては彫刻にもすぐれた手腕を発揮した例が多い。

いっぽうで牧畜民の怠惰な暮らしぶりについては、かねてから多くの人たちが観察してきた。たとえば探検家ブルジェヴァリスキーによる一九世紀の記録によれば、モンゴルの男たちは互いのテントを訪問しては茶をのみ、雑談に興ずるのが日課である。馬や駱駝の世話は男の仕事だが、それにかかる手間は限られている。牛と羊は女の仕事であるし、裕福な牧民であれば、すべての家畜の世話を雇い人にまかせてしまう。そしてテント間の行き来は、どんなに近くとも歩くのは恥とし、かならず騎乗する、というのだった。

牧民社会の重要な特徴として、父系の系譜をひじょうに大切にしている。よって父系の祖先は敬われ、始祖を共有する父系大氏族がうまれやすい。そしてこの始祖がしばしば神へと格上げされる。それは父なる神であり、天にいますと考えられる場合も多かった。牧畜民において天の父なる神という觀念がひろく見られるのは、こうした伝統と関係があろう。

もうひとつ挙げるなら、農耕民への軽蔑的態度ということがある。これは中央から西アジアにかけてのみならず、アフリカの牧畜民についても繰り返えし指摘される。そこでは農耕とは低級で、瑣末で、ほとんどやる価値のない仕事とされていたり、嫌悪の対象ともされる所があったのである。

当然、こうした精神性は時代とともに変わってきてはいよう。しかし現地をよく知るフィールドワーカーは、今もそうした基本形が残っていることに、敏感に気づいている。たとえばモンゴル研究のシンジルト、アフリカ研究の藤本武という二人のよき友人と雑談していたときのこと。牧畜民と農耕民のメンタリテイの違いに話題がおよんだところ、二人とも心からよく分かると言っていた。何しろ藤本さんはエチオピア農

耕民をフィールドとしているが、牧畜民たちからの襲撃であわや命をおとしかけた人だ。シンジルトさんもまた「牧畜民たちと話していると、いつの間にか自分たちの自慢話を始めてしまう。あの尊大ぶりは変わらない」と笑っていた。現代日本にくらしているとなかなか想像できないかもしれないが、古い民族誌をよみ、信頼できる現地調査者に話をきけば、^(a) 変わらぬ何かが見えてくるのだ。

こうした牧父性は、農母性とはおおしく異なる。第二次大戦中、モンゴルに置かれた西北研究所で、牧民たちの生活を身近に観察した研究者たちは、^(b) その違いに敏感だった。ここでは石田英一郎と梅棹忠夫の二人をとりあげよう。

石田は戦後、一九四九年に國學院大學での講演で、およそ次のように述べた。モンゴルで一人の上天神じょうてんしんが信じられているという事実を、ヨーロッパからの旅行者たちは驚きとともに記録してきた。その本来的な形としての天の崇拜は、ユーラシア内陸の遊牧民族に見いだされ、その神は世界秩序の摂理の力でもある。こうした合理主義的観念は「一望無涯の広野にあつて、頭上にいただく天穹てんきゆうそのものの規則的な廻転を不斷に観察する遊牧民の生活にふさわしいもの」で、人格化して表象される場合には、父としてあらわされる。この信仰はユダヤ教・キリスト教・イスラームにおける上天の唯一神や儒教にみる天の思想にまで、引きつがれた。一方これに対置される、生成や豊饒ほうじょうの源泉としての大地という女性原理と結びついた農耕的信仰は、仏教や道教さらにヒンドゥー教につながる、と。そして、私の用語にしたがえば牧父的な原理と農母的な原理とのせめぎあいだが、ユーラシア大陸における信仰史の基調をなしている、と見たのである。直感的にいわれる西洋性・東洋性というちがいが、ここにさかのぼるのかもしれない。

梅棹の方も、メンタリテイの違いという所から出発する。つまりモンゴルの騎馬遊牧民は、遊牧しない定住的農耕民とある種の交渉はもつものの、その関係はかなり断絶的である。農耕地と放牧地の関係は、おおむね非常にはつきり隔離されている。相互にこれが入り乱れたり、相互浸透するということはまずない。そして接触をもつ時には、つねに遊牧民が優越的立場でのぞむ。歴史的にみれば、中国古代においてステップ遊牧民が定住中国社会へ出撃してきたのは、草原が充実し、家畜が肥え、草原帝国の国力が充実したときである。つまり軍事行動とは、「^(c) みちあふれたエネルギーを消費にやってくる」ものだった、という。人間を移動へ駆りたてる本能的エネルギーが、つねに消費されていた狩猟採集の社会と、ため込んだそれを時おり爆発させる騎馬遊牧民の社会、と言つてもよいかもしれない。

石田と梅棹の抱いていた基本的な構図を、より具体的に、歴史的な観点からとらえたのは江上波夫だった。『ユーラシア古代北方文化』(一九四八年)で描きだした見取図に、それははつきり示されている。つまり紀元前六世紀ないし前三世紀、一方ではユーラシア大陸の湿潤地帯における中国、インド、ペルシャ、地中海(ギリシャ・ローマ)という四大勢力圏が確立し、人口増加と繁栄が見られ、各勢力圏間の交易通商がさかんになった。その一方では乾燥地帯において騎馬民族が興隆し、これら湿潤富饒ふじょう地帯への侵攻・掠奪りやくだつ、という拮抗ぎょくかう関係が生じたの

である。

(山田仁史『人類精神史』筑摩書房)

問一 二重傍線部 (1)・(2)・(3) の意味として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(1) は解答欄 21 に、

(2) は 22 に、(3) は 23 にマークしなさい。

(1)

21

- ア 浮かれて騒ぎまわること。
イ 定住せずに移動すること。
ウ 楽しみにふけて暮らすこと。
エ 決まった経路から外れること。
オ 落ち着くことなく変化すること。

(2)

22

- ア 思いいれをもっておこなうさま。
イ きっぱりと決められないさま。
ウ 当たり前のように続くさま。
エ 関係を絶ちがたいさま。
オ 注意深く見守るさま。

(3)

23

- ア 互いに融通しあい共榮すること。
イ 互いに傷つけあい憎みあうこと。
ウ 互いに優劣なく張り合うこと。
エ 互に関心なく並立すること。
オ 互いに交渉し混じり合うこと。

問二 傍線部 (a) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 24 にマークしなさい。

ア 牧畜民の生活は十九世紀から多くの人が観察し記録しており、記録のために怠惰な生活や自慢話につき合ったり、調査の過程であやま命を落としかけたりしてもフィールドワークを続けるなど、研究対象を理解しようとする研究者の態度は変わることなく保たれているとわかるということ。

イ 牧畜民の暮らしぶりは時代とともに大きく変わり、古い時代の記録に見られるような怠惰さは認められなくなったが、現地に詳しいフィールドワーカーの報告によれば、天の父なる神という観念が広く見られるなど父系の系譜を尊重する姿勢は変わることなく保たれているとわかるということ。

ウ 牧畜民の文化にも地域によって違いがあり一概に規定できないが、技術の側面において動産的な織物や彫刻を発展させてきたことは、古い民俗誌や現在の研究者の観察でも確かめられ、それが中央アジアからアフリカにかけての牧畜民の文化において変わることなく保たれているとわかるということ。

エ 牧畜社会は十九世紀以来農耕を軽視し続けており、裕福な牧民はそれを雇い人に任せてしまうという事実は、昔の探検家の記録にも現在の信頼できる現地調査者の話にも確認でき、農耕中心の日本人の感性では想像しがたいメンタリティが変わることなく保たれているとわかるということ。

オ 牧民社会も時代とともに変化しており、生活や精神性も昔のままというわけではないだろうが、十九世紀の観察記録に記された生活態度と現在の調査者の体験や観察とを突き合わせてみると、父系を中心にまつまり農耕民を軽く見る態度などは変わることなく保たれているとわかるということ。

問三 傍線部 (b) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 25 にマークしなさい。

ア モンゴルの騎馬遊牧民の思想は、天穹の運動から生じた牧父的信仰であり、これはキリスト教の一神教の思想と同根の西洋的な思想であるが、東洋には大地の豊饒という女性原理から生じた仏教や道教などの農母的信仰しか存在しないという違い。

イ 遊牧民ははてしない広野においてつねに変わらない天体の運動を男性原理とみて、キリスト教やユダヤ教などの牧父的信仰を生み、農耕民は生命を生み出す大地に女性原理を見いだして、仏教やヒンドゥー教などの農母的信仰を生んだという違い。

ウ ユダヤ教やイスラームの唯一神や道教の天の思想は、広野で天体の運動とともに生きていた遊牧民族に共通する牧父的信仰であり、仏教や儒教の思想は、農耕民が向き合ってきた生命を生み出す大地と結びついた農母的信仰であるという違い。

エ 天体のメカニズムという世界秩序を人格化した遊牧民の牧父的信仰は、本能的エネルギーをため込んで時おり爆発させる社会を作り、豊饒を生む大地を人格化した農耕民の農母的信仰は、耕作につねにエネルギーを消費する社会を作ったという違い。

オ ユーラシア大陸の信仰史は牧父的信仰と農母的信仰とのせめぎあいの歴史が基本であり、先行して生まれた宇宙の人格化である男性原理に基づく唯一神や天の思想は、足元の大地の人格化である女性原理に基づく農耕的信仰に優越しているという違い。

問四 傍線部 (c) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 26 にマークしなさい。

ア モンゴルの騎馬遊牧民が古代中国の農耕社会に侵攻したのは飢餓などの事情ではなく、安定した生活の中で蓄えられた余剰の力を発散する機会を求めてであったということ。

イ ステップ遊牧民は定住中国の草原帝国が充実するのを見計らって軍事行動を起こすが、それはありあまる力を外に向けて爆発させる必要があったからだということ。

ウ 中国、インド、ペルシャ、地中海の四大勢力圏の国力が充実したため、人口増加であふれた騎馬民族が移動のエネルギーを消費し乾燥地帯に出撃したということ。

エ 騎馬遊牧民は定住的農耕民に対しつねに優越的立場でのぞむため、遊牧民の出撃を恐れる農耕民は牧畜民の充実した力を交渉で消費するように仕向けたということ。

オ 乾燥地帯の騎馬民族は歴史上たびたび湿潤地帯の繁栄した勢力圏で掠奪をおこなったが、それはやり場のない怒りのエネルギーをぶつけていたのだということ。

問五 問題文の内容としてふさわしいものを、次のア～カの中から二つ選び、解答欄 27 に二つマークしなさい。

- ア 牧畜民は交易をおこなうため、皮革製品や金属加工、陶器や装飾品などの動産を作る優れた技術を発展させた。
- イ 牧畜民が農耕を嫌悪の対象とする伝統は、プルジェヴァリスキーの報告にも見いだすことができる。
- ウ モンゴルの牧畜民は、さほど手のかからない馬や駱駝の世話は男が受け持ち、女たちは牛と羊の世話をおこなっている。
- エ モンゴルで上天神が信仰されているという事実を、一九四九年の講演会でヨーロッパからの旅行者が報告した。
- オ 江上波夫のユーラシア大陸の四大勢力圏の見取図は、石田英一郎や梅棹忠夫の認識と共通するものであった。
- カ 農耕地と放牧地の関係は互いに断絶したものであり、相互に侵攻したり交渉したりすることはない。

〔文学部日本文学科・中国文学科・史学科は **必須**。文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は **選択**〕

文学部日本文学科・中国文学科・史学科は解答欄

41

 ～

59

 に、文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は解答欄

41

 ～

54

 に解答すること。

(文学部日本文学科・中国文学科・史学科は問一～問十で40点)

(文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は問一～問七で30点)

次の文章は、『和泉式部日記』の一節で、女が恋人の宮の屋敷に移り住むことを考えている場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「かばかり ^(a) ねんごろにかたじけなき御心ざしを、見ず知らず ⁽¹⁾ 心強きさまにてもてなすべき。異事 ⁽²⁾ はさしもあらず」など思へば、参りなむと思ひ立つ。まめやかなることども言ふ人々もあれど、耳にも立たず。「心憂 ⁽³⁾ き身なれば、宿世にまかせて ^(b) あらむ」と思ふにも、「この宮仕へ本意にもあらず。巖 ⁽⁴⁾ の中こそ住まほしけれ。また憂きこともあらばいかがせむ。いと心ならぬさまにこそ思ひ言はめ。なほかくてや ⁽¹⁾ 過ぎなまし。近くて親はらからの御有様も見きこえ、また昔のやうにも見ゆる人の上をも見定めむ」と思ひ立ちにたれば、「あいなし。参らむほどまでだに、^(c) 便なきこと ^(v) いかで聞こしめされじ。近くてはさりとも御覧じてむ」と思ひて、好き事せし人々の文をも「なし」など言はせて、さらに返り事もせず。

宮より御文あり。見れば、「さりととも頼みけるが ^(d) をこなる」など、多くのことどものたまはせで、「いさ知らず」とばかりあるに、胸うちつぶれて、^(e) あさましうおぼゆ。めづらかなるそらごとどもいと多く出で来れど、「さはれ、なからむことはいかがせむ」とおぼえて過ぐしつるを、これは ^(w) まめやかにのたまはせられたれば、「思ひ立つことさへほの聞きつる人も ⁽²⁾ あべかめりつるを、をこなる目をも見るべかめるかな」と思ふにかなしく、御返り聞こえむものとおおほえず。またいかなること聞こしめしたるにかと思ふに恥づかしくて、御返りも聞こえさせねば、「ありつることを恥づかしと思ひつる ^(x) なめり」とおぼして、「なか御返りもはべら ^(y) ぬ。さればよとこそおほゆれ。いとくも変はる御心かな。人の言ふことありしを、^(f) よもとは思ひながら、『思はましかば』とばかり聞こえしぞ」とあるに、^(g) 胸少し開きて、御気色もゆかしく、聞かまほしくて、「まことにかくもおほされば、

問二 傍線部 (b) は具体的にはどのようにすることか。最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 43 にマークしなさい。

- ア 人々の忠告に従おう、ということ。
- イ 現状を維持しよう、ということ。
- ウ 出家しよう、ということ。
- エ 宮の屋敷に移ろう、ということ。
- オ 親と子の面倒を見よう、ということ。

問三 傍線部 (d) はどのようなことか。最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 44 にマークしなさい。

- ア 宮の屋敷に移るはずがないと宮が女を信じていたことが馬鹿げている、ということ。
- イ 隠し事が宮には気づかれないはずだと女が安心していたことがあさはかだ、ということ。
- ウ 一途に自分を思ってくれているものだと宮が女をあてにしていたことが愚かだ、ということ。
- エ 放っておけば迎えに来てくれるはずだと女が宮を頼っていたことが甘え過ぎている、ということ。
- オ うわさが流れないものだと思っていて女が他の男たちに返事を出さなかったことが失敗だ、ということ。

問四 傍線部 (e)・(g) の心情になった理由として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(e) は解答欄 45 に、(g) は 46 にマークしなさい。

(e)

45

ア 宮がうわさを信じて女を見放そうとしているから。
イ 宮が冗談か本気か分からない手紙を送ってきたから。
ウ 宮が女から連絡がないことを本気で怒っているから。
エ 宮が感情的になって短い手紙しか送ってこないから。
オ 宮が女との約束を一方的に破ろうとしているから。

(g)

46

ア 宮がうわさを信じていたことに気づいたから。
イ 宮が愛想を尽かしていないことが分かったから。
ウ 宮が女の心変わりに気づいて引き留めようとしたから。
エ 宮が女からの返事を待っていただけだったから。
オ 宮がうわさの真相を知って謝ってきたから。

問五 傍線部 (f) の解釈として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 47 にマークしなさい。

- ア まさかそのようなことはないだろう
イ すでにそのようになっていたのだろう
ウ かならずそのようになってしまっただろう
エ たぶんそのようなこともあるのだろう
オ おそらくそのようにならないことはないだろう

問六 本文中の和歌についての説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 48 にマークしなさい。

ア 女が恋しいけれどもそちらに行けないと贈ったのに対して、宮は都合のよい言い訳を思いついたねと答えている。

イ 女が会いたくてもうわさが気になると贈ったのに対して、宮は浮き名はいずれ立つものだよと答えている。

ウ 女が行きたくても行くことができないと贈ったのに対して、宮はその程度の愛情ではこちらも願ひ下げだねと答えている。

エ 女が今すぐこちらに来てほしいと贈ったのに対して、宮は名が立つではないけれど行くまでに時が経つよと答えている。

オ 女が外聞があるからこちらに来てほしいと贈ったのに対して、宮は自分とうわさになることを嫌がっているのだねと答えている。

問七 波線部の動詞(1)「過ぎ」・(2)「あ」の、

1 活用の行 2 活用の種類 3 活用形

は何か。該当するものを、次のア～カの中から一つずつ選び、(1)の 1 は解答欄 49 に、2 は 50 に、3 は 51 に、

(2)の 1 は 52 に、2 は 53 に、3 は 54 にマークしなさい。

1 ア	ア行	イ	カ行	ウ	ガ行	エ	サ行	オ	ラ行	カ	ワ行
2 ア	四段活用	イ	上一段活用	ウ	上二段活用	エ	下一段活用	オ	下二段活用	カ	変格活用
3 ア	未然形	イ	連用形	ウ	終止形	エ	連体形	オ	已然形	カ	命令形

注意 文学部日本文学科・中国文学科・史学科は、次のページに問題が続きます。



問八 (文学部日本文学科・中国文学科・史学科のみ解答すること)

二重傍線部 (V)・(W) の現代語訳として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(V) は解答欄 55 に、(W) は 56 にマークしなさい。

(V)

55

- ア 何とかしてお耳に入れないようにしよう
- イ どのようにしても聞かれることはあるまい
- ウ 何があっても自然とお聞きになることはないだろう
- エ どうにかして聞いていたただかなくてはならないだろう
- オ どうしてお聞きにならないことがあるだろうか、いやないだろう

(W)

56

- ア 詳細に言わせなさったので
- イ 穏やかにおっしゃっていたら
- ウ 真剣におっしゃっているのです
- エ まじめに言わせなさっていたら
- オ こまめにお伝えになっっているのです

問九 (文学部日本文学科・中国文学科・史学科のみ解答すること)

二重傍線部 (X)・(Y) の助動詞の意味として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(X) は解答欄 57 に、(Y) は 58 にマークしなさい。

- ア 打消
- イ 完了
- ウ 断定
- エ 推定・伝聞
- オ 強意・確述

問十 (文学部日本文学科・中国文学科・史学科のみ解答すること)

二重傍線部 (Z) の用法に関する説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄

59

 にマークしなさい。

- ア 「腹が立つ」という感情だけがあることを示している。
- イ 「名が立つ」ことに加えて「腹が立つ」ことを示している。
- ウ 実際に「立つ」ことのない「腹」まで「立つ」ことを示している。
- エ 「立つ」のはせめて「腹」だけにしてほしいということを示している。
- オ 「腹」と「名」を対比して「腹」の方が重要であることを示している。

〔文学部日本文学科・中国文学科・史学科は **必須**。文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は **選択**〕

文学部日本文学科・中国文学科・史学科は解答欄 **61** ～ **69** に、文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は解答欄 **61** ～ **68** に解答すること。

（文学部日本文学科・中国文学科・史学科は問一～問七で20点）

（文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は問一～問六で30点）

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、問いの都合で返り点・送りがなを省いた部分がある。

世俗伝、包希文以正直主東岳速報司、山野小民無
 不知者。庚子秋、太安界南征兵掠一婦還云、是希文孫
 女、頗有姿色。倡家欲高価買之。婦守死不行。主家利其
 財、捶楚備至、婦遂病。隣里嗟惜而不能救。里中一女巫、
 私謂人云、我能脱此婦、令適良人。即詣主家、閉目吁氣、
 屈伸良久、作神降之態。少之、瞑目咄吒呼主人者出、大
 罵之。主人具香火、俛伏請罪、問何所触尊神。巫又大罵

云、我速報司也。汝何敢以我孫女為倡。限汝十日、不嫁之良家、吾滅汝門矣。主家百拜謝、不數日嫁之。

（『統夷堅志』）

（注）○包希文—人名。名裁判官として知られた。○東岳—山の名。泰山。○速報司—死後の世界で裁判を司る役人。

○小民—庶民。○庚子—干支によって、年を示す表記。○太安—地名。○界—周辺。あたり。

○南征兵—南方に遠征していた他国の軍隊。○掠—奪い取る。強奪する。○倡家—女性を置いて客を遊興させる店。

○捶楚—むちうつ。○嗟惜—大声をあげて、嘆き悲しむ。○女巫—巫女。○良人—良家の人。

○吁氣—息を深く吐く。○態—ふるまい。様子。○咄吒—どなる。○俛伏—ひれふす。

○何所触尊神—どのような尊い神様のお怒りに触れてしまったのでしょうか。

問一 波線部 (X) と (Z) の送りがなを含めた読み方として最もふさわしいものを、次の ア～エ の中からそれぞれ一つずつ選び、(X) は解答欄 に、(Y) は に、(Z) は にマークしなさい。

(X) 頗			
61	ア	イ	ウ
	たちまち	まことに	いよいよ
	すこぶる		
(Y) 私			
62	ア	イ	ウ
	ひそかに	ひさしく	まことに
			わづかに
(Z) 即			
63	ア	イ	ウ
	かならず	ただちに	すなはち
			いそぎ

問二 傍線部 (a) の解釈として最もふさわしいものを、次の ア～エ の中から一つ選び、解答欄 にマークしなさい。

- ア 死ぬと思い、行動しなかった。
- イ 死にたくないと、拒絶した。
- ウ 死のうとして何も行動しなかった。
- エ 死を覚悟して、拒絶した。

問三 傍線部 (b) の理由として最もふさわしいものを、次の ア～エ の中から一つ選び、解答欄 にマークしなさい。

- ア 包希文の孫女が倡家に売られることを拒否し、亡くなったから。
- イ 強奪された婦のなんとも憐れな境遇を悲しんだから。
- ウ 南征兵が財産を得るために攻め込んできたから。
- エ 倡家が財産を得るために南征兵に協力したから。

問四 傍線部(c)の書き下し文として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、解答欄 **66** にマークしなさい。

- ア 良人りやうじんをして適ゆかしむと
- イ 令れいして良人りやうじんに適ゆかんと
- ウ 良人りやうじんに適ゆかしめんと
- エ 適まさに良人りやうじんならしめんと

問五 傍線部(d)の解釈として、最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、解答欄 **67** にマークしなさい。

- ア 孫女を良家に嫁がせなかったならば、お前の一族を滅ぼすぞ。
- イ 孫女を良家に嫁がせなかったならば、孫女の一族に滅ぼされるだろう。
- ウ 私を良家に嫁がせなかったならば、孫女の一族に滅ぼされるだろう。
- エ 私を良家に嫁がせなかったならば、お前の一族を滅ぼすぞ。

問六 本文の内容と合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、解答欄 **68** にマークしなさい。

- ア 包希文は孫女の境遇を見て、主人のもとにやってきて、厳しい判決を下した。
- イ 女巫は厳しい境遇に耐えつつ、包希文の力を借り、良家の人と結婚することができた。
- ウ 一婦は高値で売られそうになったが、女巫のおかげで結婚することができた。
- エ 包希文の孫女は売られることを拒絶して亡くなったが、女巫の力を借り、恨みを晴らした。

注意 文学部日本文学科・中国文学科・史学科は、次のページに問題が続きます。



問七 (文学部日本文学科・中国文学科・史学科のみ解答すること)

二重傍線部は「何の尊神に触るる所なるかと問ふ」と読む。これに従って施す返り点として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、解答欄 69 にマークしなさい。

ア 問_二 何_二 所_レ 触_二 尊_一 神_一

イ 問_四 何_三 所_三 触_二 尊_二 神_一

ウ 問_下 何_下 所_上 触_二 尊_二 神_一

エ 問_下 何_下 所_上 触_二 尊_二 神_一